鳥取市・桂見２号墳出土鉄製品の再整理

髙田健一[1]・高尾浩司[2]

要旨

桂見２号墳は、山陰における出現期古墳として著名である。その主要埋葬施設の副葬品が鳥取県指定保護文化財に指定されるにあたって、刀や農工具などの鉄器の再整理をおこなった。一つの埋葬施設に複数器種、複数点の副葬がおこなわれる点は弥生時代に比べて大きく異なる点であるが、鉄器を個別に検討すると、弥生時代の地域性や生産技術を引き継ぐ要素が散見された。また、刀は、副葬時にはすでに破損した状態であった可能性を指摘するとともに、農工具の副葬位置などから同一の棺内に複数の埋葬がおこなわれたと考えられる。鳥取県東部を中心に認められる同棺複数埋葬の先駆けとなる可能性がある。

キーワード

刀、針、鉈、直刃鎌、刀子、布巻き鉄器、古墳時代前期、方墳、同棺複数埋葬、鳥取県指定保護文化財

１　はじめに

鳥取市・桂見２号墳出土遺物は、主要埋葬施設の副葬品である中国製の銅鏡２面と刀や農工具など複数の鉄製品が存在し、墳丘頂部で出土した土器群や石杵とともに弥生時代から古墳時代への移行期における葬送儀礼のあり方を具体的に示す資料として注目されてきた。その重要性に鑑みて、桂見２号墳出土遺物は平成 31 年に県指定保護文化財に指定することが諮問され、令和５年２月に鳥取県文化財保護審議会が銅鏡２面と鉄製品７点を県指定保護文化財に指定する答申をおこなっている。

桂見２号墳出土鉄製品は、器種や形態的特徴の多くが弥生時代からの系譜で捉えられる一方、棺内への複数埋葬という出土状態が当地域の弥生時代墳丘墓には見られない新しい要素を伴う。県指定保護文化財の候補として評価を検討していく上で、発掘調査報告書（船井他 1984）に掲載された実測図と所見では錆膨れや酸化土砂を除いた本来形状や破面の情報などの詳細が明らかでなく、再検討が必要と考えた。そのため、あらためて発掘調査時の一次資料（実測図及び記録写真）に当たって出土状況を確認するとともに、Ｘ線透過撮影と肉眼観察をもとに鉄製品を再実測、再整理した。

小論では、桂見２号墳出土鉄製品について再整理結果に基づく所見を報告するとともに、近隣の出土例との比較をとおして、その位置づけを検討する。

２　桂見２号墳の概要

桂見２号墳は、鳥取平野の南西部、湖山池の南東岸に位置する低丘陵上に存在した古墳時代前期初頭の方墳である（図１）。住宅地造成工事に伴って、1983 年に発掘調査された（船井他前掲）。同じ丘陵上では、弥生時代終末期に位置づけられる１号墳が隣接して調査されたほか、弥生時代後期の土壙墓群も発見されている。遺跡は調査後に消滅したが、鳥取県のみならず、山陰地方における古墳の出現過程を考える上で欠かせない重要資料と考えられてきた。

２号墳の墳丘規模は、長軸 28m、短軸 22m、高さ 4.5m を測る。１号墳との間に幅 2.5m、深さ 0.4m の溝があり、その底部から広口壺、甕が複数点出土している。墳丘は、大部分を地山削り出しによって形成するが、一部は盛土をおこなっている部分もある。

墳頂部には、長軸 14.5m、短軸 12m の平坦面に三つの埋葬施設が設けられていた。一つは、平坦面の中心に位置する主要埋葬施設（第１主体）で、墳丘長軸に並行して、墓壙上面の規模が長さ 7.5m、幅 4.9m となるものである。墓壙が２段にわたって掘り込まれ、その底部には長さ 4.3m、最大幅 1.1m の箱形木棺が置かれていた。

主要埋葬施設の南東側には、副次埋葬施設（第２主体）として土壙墓がある。土壙の縁辺に人頭大の角礫を配置するもので、副葬品は存在しなかった。また、主要埋葬施設の墓壙の北東隅部に重複するように、土器棺墓（第３主体）が営まれていた。土器は、胴部最大径が 50cm 程度、高さが推定 70cm ほどとなる大型の壺で、頸部から肩部にかけて竹管文や羽状文、波状文などを施すもの

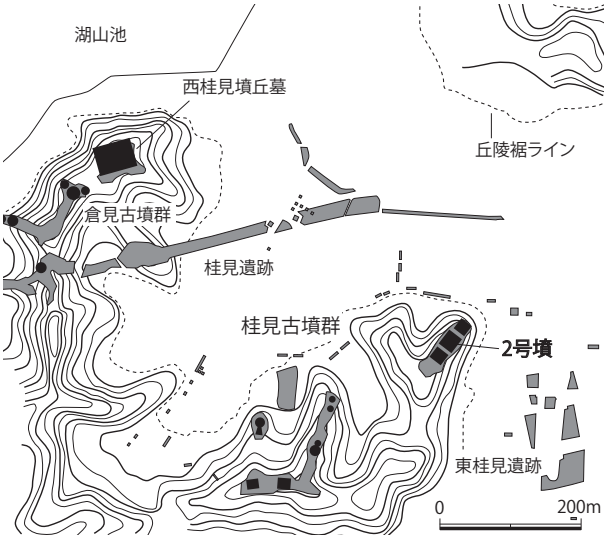


図１　桂見２号墳の位置（アミカケは既往の調査区）

[1] 鳥取大学地域学部・鳥取県文化財保護審議会専門委員　[2] 鳥取県地域社会振興部文化財局文化財課

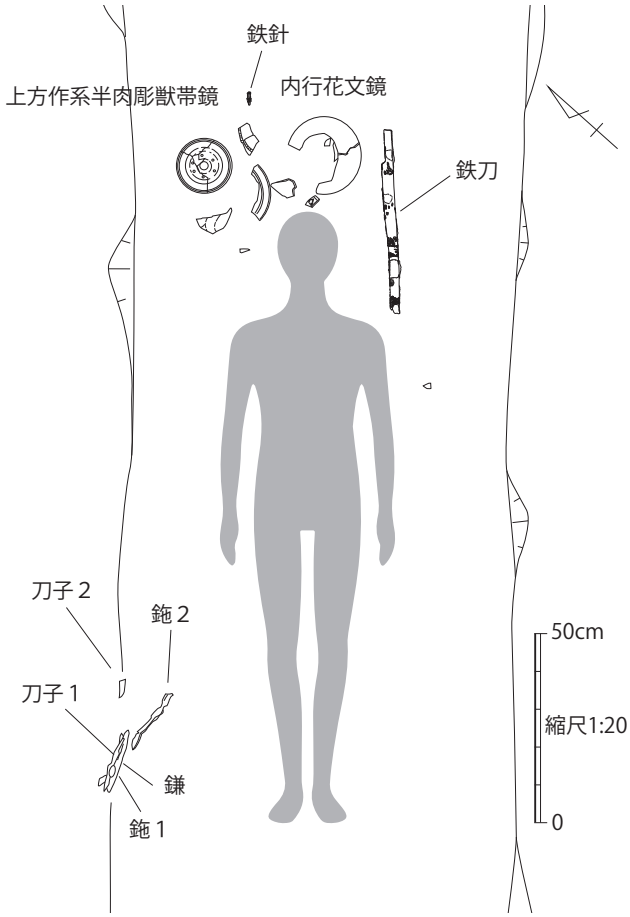


図２　遺物の出土状況（人形は165cmで、位置は推定）

である。やはり、副葬品は伴っていない。

主要埋葬施設の副葬品は、棺内中央部の２箇所から出土した。被葬者の頭部と考えられる位置から中国製の銅鏡２面と刀１本、針５本が、足元付近と考えられる位置から鉈２点、刀子２点、鎌１点が出土している（図２）。

３　出土鉄器の観察

（１）刀（図３）

現存長48.7cm、刀身幅2.5～3.0cm、厚さは最大で1.0cmを測る。切先と茎端部を欠失する。刀身は中央付近から切先にかけてやや内反りの形状を呈す。関の形状はナデ関となる。茎部幅は2.0cmで、やや関の切れ込みが深い。刀身、茎部ともに装具はなく、直接布が巻き付けられていた痕跡がある。

（２）針（図４－１）

長さ3.4cm、径0.2cmほどの針が５本ある。報告書では針状鉄製品と呼ばれ、「樹皮を巻きつけた木質部に差し込んだように見える」と記述されたため、漁労具のヤスである可能性も考えられてきたが、このたび詳しく観察したところ、報告書の結論通り、裁縫用の針とみて良いと考えられる。Ｘ線写真も検討したが、残念ながら針頭方向は欠損しているようで、針穴があったかどうかは確認できない。また、針の両端を確認できるものがないので確定的ではないが、長さは個体差があるようだ。サビなどによって見えない部分に６本目が存在する可能性もある。大谷宏治による分類では、５㎝未満のａ類で、保有形態としては針筒内に収められる甲類となる（大谷2012）。

銹着状況や残存する木質部の形状からすると、直径1.2cmの木製の筒形容器に収められていたと考えられる。現在銹着している木質部は、針と直交する向きに端面が存在する。木質部に隠れた側の方が針先と考えられることからすると、この木質部は、筒形容器の蓋になる可能性がある。針の胴部には布痕の一部や樹皮状の木質が直接付着することから、筒形容器の木製蓋以外の部分は繊維製であった可能性がある。

（３）刀子１（図４-２）

刀子は２点出土している。刃部のみ残存するものを刀子１とする。現存長9.0cm、身幅1.4cmと後述する刀子２よりもやや小ぶりである。一方の面のみに布の痕跡が付着しており、刀子２や鎌と一体だった可能性がある。出土状態では、鎌に密接して鉈１が存在するので、刀子２の上面に重ねられた可能性が考えられる。

（４）刀子２（図４-３）

もう１点の刀子は鎌と銹着した状態のもので、これを刀子２とする。全長15.0cm、身幅1.9cmを測るやや大型品である。ナデ関で、茎長は3.4cmと短く、茎尻が欠損しているように見える。直線的であるため、意図的な裁断とみる余地もある。ほぼ同じサイズとなるものに、滋賀県・雪野山古墳出土例（福永他1996）や、奈良県・黒塚古墳出土例（岡林他2018）がある。雪野山古墳例は直角関であるが、黒塚古墳例はナデ関のものが多く、柄がつく点を除いてよく類似する。

後述する鎌と密着しており、刀子が銹着する面にのみ布の痕跡が残る。複数の鉄器をまとめて布巻きしていたと考えられる。

（５）鎌（図４-４）

全長14.2cm、身幅2.8cmを測る直刃鎌である。刃部を手前、着柄部を右側においた場合、折り返しが上向きになる甲技法（都出1967、p.47）である。上述の刀子１と直接銹着しており、着柄部に木質などの痕跡は認められない。

身の中央よりやや先端寄りで、やや背部寄りの位置に径３～５mmの円孔が二つ穿たれている。孔間の距離は1.5cmほどである。着柄部とは無関係の位置であり、孔周辺に紐などの有機物の付着は認められないから、その機能はよくわからない。

（6）鉇１（図４- ５）

鉇が２点ある。ほぼ同形同大の鏝状の刃部をもつ。弥生時代後期中葉に西部瀬戸内地域で創出され、古墳時代初頭に各地で主体を占めるタイプである（村上 1998、田中 2008）。いずれも柄は着装されておらず、鉄身に直接布巻きされていたと考えられる。ほぼ完存して、付着した布の痕跡がよく残る方を鉇１とし、端部を欠損して布の残りが良くない方を鉇２とする。鉇１は、鎌と近接して出土したもので、本来はこれらと一体的にまとめられていた可能性がある。

全長 16.5cm で、刃部長は 3.5cm ある。刃部幅 1.2cm、茎部幅 1.0cm で、厚さ 0.4cm を測る。刃部には明瞭な鎬があり、背面には裏すきがある。また、刃部の反りが大きい。茎端部が先細りとなるが、左右均等に細くなっているわけではなく、表面から見た場合に右側の方が深く切れ込み、偏りがある。

付着する布の痕跡から、斜め 45° の角度で細い布を２重に巻いている様子が窺える。

（7）鉇２（図４- ６）

鉇２は、現存全長 16.0cm で、刃部長は 4.0cm あって鉇１よりもやや大きい。刃部幅 1.3cm、茎部幅 1.0cm で、厚さ 0.4cm を測る。

鉇１の東側でやや離れて出土した。３片に破損しており、互いに接合するが、部分的に樹脂による補修が加えられている。茎端部は欠損しており、鉇１と同様な先細りの形態になるかどうかわからない。

現状で顕著な布の付着は認められないが、裏面の一部に痕跡が認められる。刀子と鎌は片面にのみ布痕跡が認められるが、鉇は鉄器の裏面にも布が付着する。農工具類は近接して出土したが、布巻きは鉇とそれ以外で分けられていた可能性も考えられる。

４　出土鉄器の位置付け

桂見２号墳の鉄製品は、弥生時代の１埋葬施設に１点程度の副葬数に比べて、種類も数量も複数に及んでおり、中国鏡の破砕副葬と相まって、当地域における出現期古墳の様相をよく表している。また、針以外の鉄製品は、柄や鞘などの装具を伴っておらず、直接布が巻かれていた様子が窺える。刀剣類が布巻き・抜き身で副葬されるのは、中国地方の前期古墳に多い副葬形態であるが（宇垣 1997）、そのような地域性を帯びたものと言える。

以下では、近隣の出土例と比較しながら、個々の鉄器の位置付けを考えてみたい。

（1）刀（図５）

まず、刀は、切先と茎尻を欠損しており、本来はどのような大きさだったのかを復元する必要がある。

かつて臼杵勲は、茎の形態分類を元に刀本体の法量分

図３　鉄刀実測図

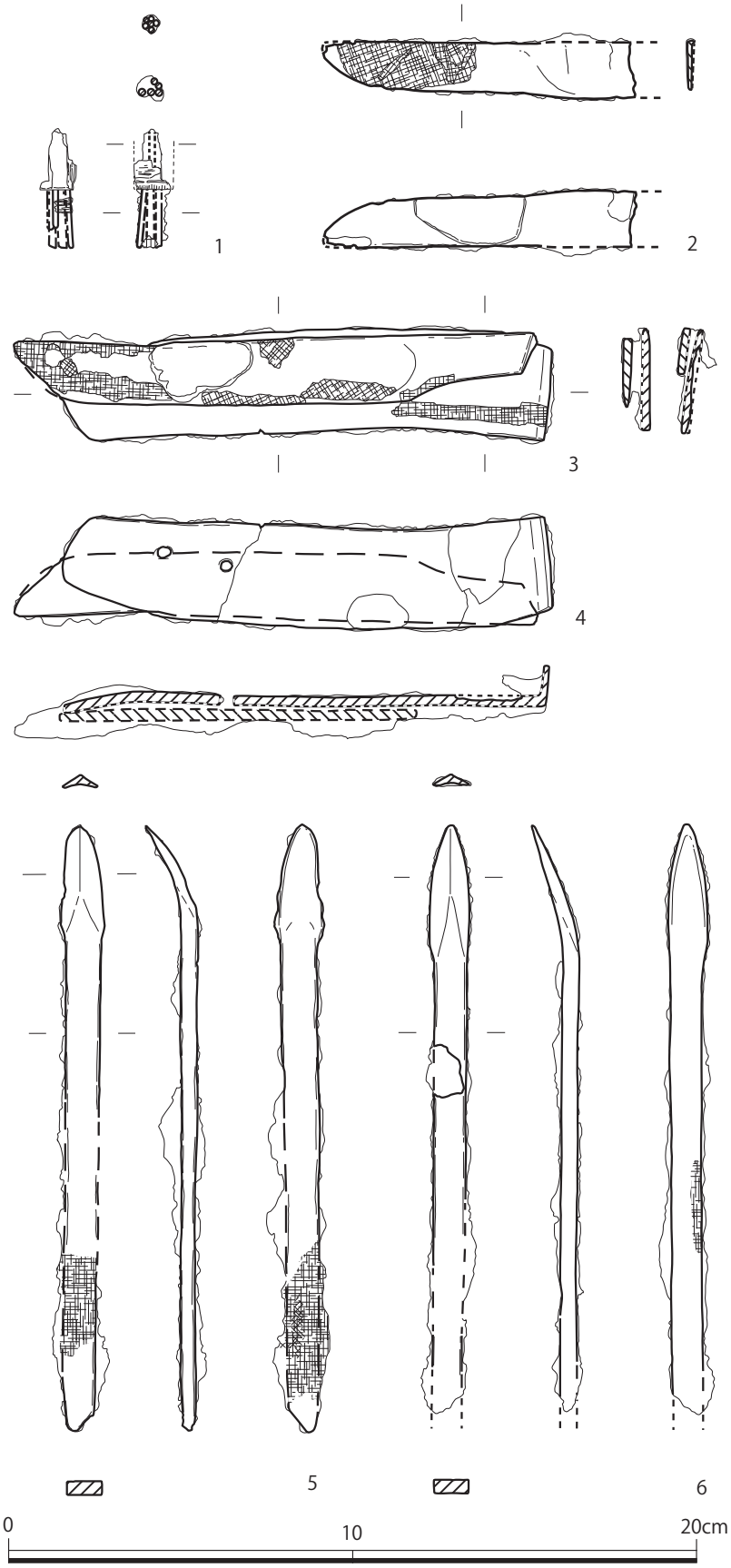


図４　鉄器実測図

析をおこない、前期に多い「一文字尻直茎」タイプでは刀身幅 3.0 ～ 3.5cm の場合に、刀身長 60 ～ 70cm になる場合が最も多く（21.2%）、次いで 80 ～ 90cm になる場合が多い（15.6%）ことを示した。他方､60cm より短くなる場合は 5.7% と少ない(臼杵 1984)。また､池淵俊一は、前期の「一文字尻直茎」タイプ直刀の茎長について、12 ～ 13cm を最多として、11 ～ 15cm に類例が集中することを指摘している（池淵 1993)。

類例が増えた現在では、改めて同様のデータ集計を踏まえる必要はあろうが、周辺の前期古墳出土例（図５- ６～８）と比較しても、桂見２号墳の刀は、本来、刀身長 70cm、茎長 13cm 程度あったとしてもなんら不思議ではないと考えられよう。つまり、切先は 30cm、茎尻は４cm 程度の欠損があると見ても大過ないと考えられる。

後述する農工具の出土地点は、撹乱を被っている可能性が報告書で指摘されているが、刀が出土した地点はそうではない。針のような微細な鉄製品が残存していることも踏まえると、埋蔵環境によって破損、消滅したのではなく、副葬時にはすでに欠損した状態であった可能性を考慮できる。

また、桂見２号墳例は、やや切れ込みが深いナデ関である点が一般的な前期古墳出土例と異なる。しかし、丹後地方から北陸地方にかけては、弥生時代終末期～古墳時代前期に切れ込みが深いナデ関の鉄刀が存在する（図５- ３、４）。これらについて、豊島直博は、自身がⅣ式とする素環刀（図５- ２）との関連が深いとして、北陸における地方生産の可能性を指摘している（豊島 2005)。豊島のⅣ式に関わりが深いと考えられる資料が鳥取市・倭文古墳群中に存在することをみると（図５- １、山田 2004)、桂見２号墳例もまた、そのような系譜上に位置付けられる可能性があろう。

（２）針

古墳出土の金属製針のうち５cm 未満のものは、前期末以降に遅れる可能性が示唆されていたが（大谷前掲)、本例に

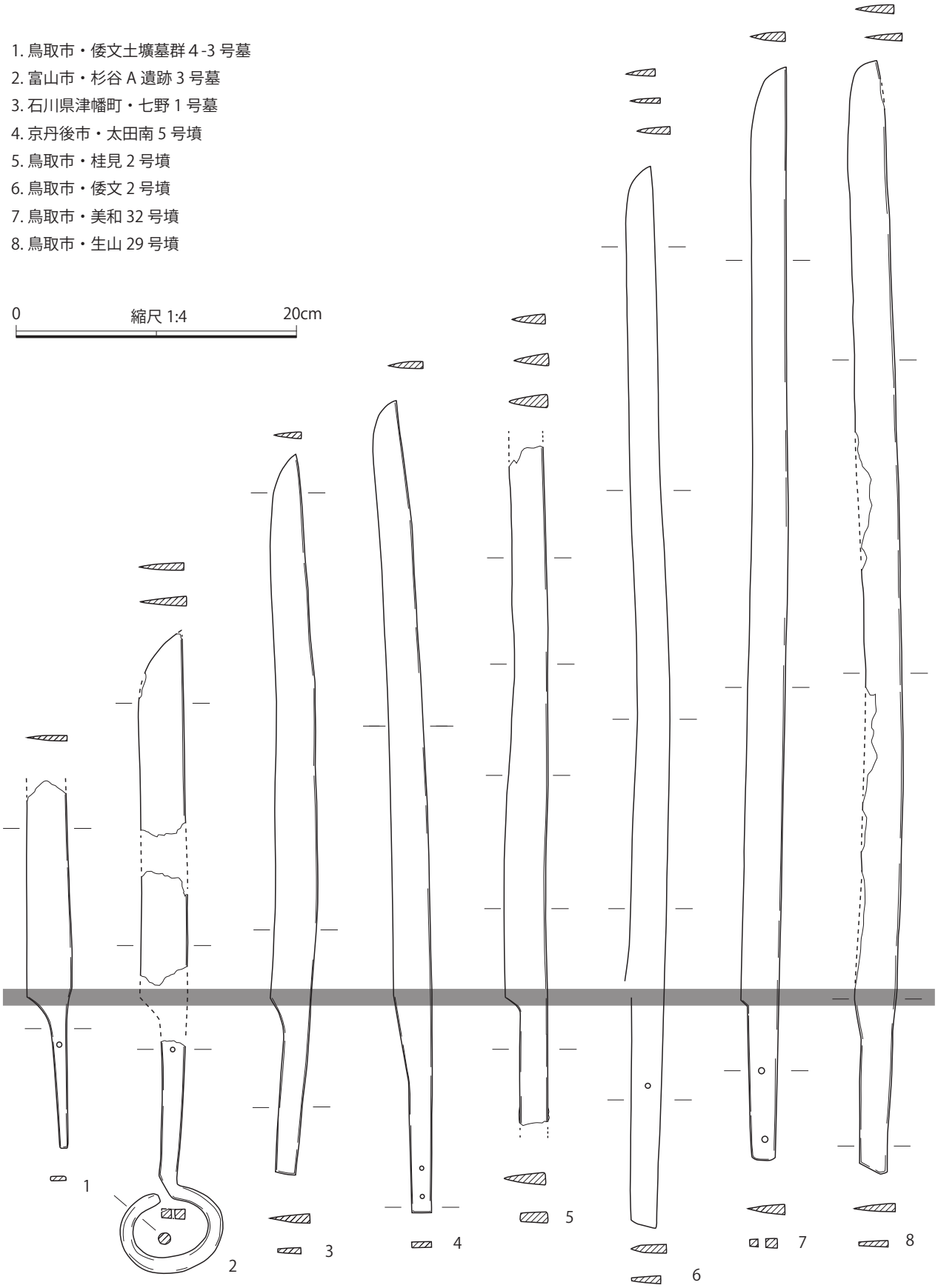
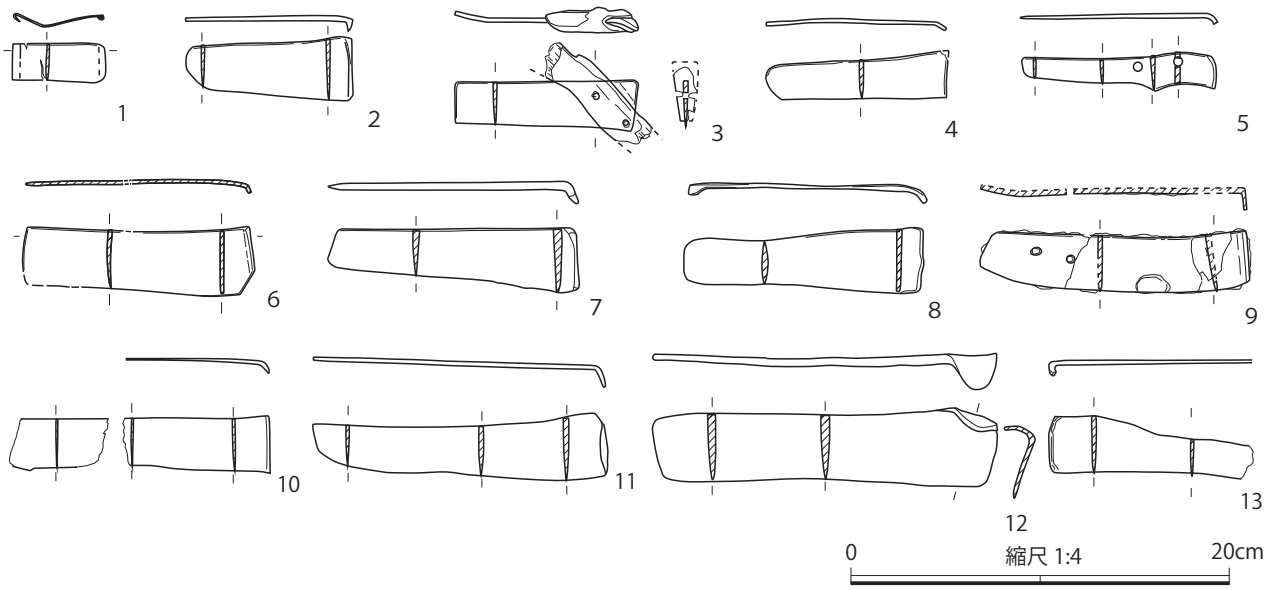


図５　桂見２号墳出土鉄刀と関連資料



1. 古海 58 号墳，2. 11. 横枕 61 号墳，3. 馬ノ山 4 号墳，4. 六部山 45 号墳，5. 美和 34 号墳，6. 伯耆国分寺古墳，7. 面影山 35 号墳，8. 大口 SX10 号墳，9. 桂見 2 号墳，10. 古海 40 号墳，12. 広岡 73 号墳，13. 本高 13 号墳

図６　桂見２号墳出土鉄鎌と関連資料

より前期前半段階まで遡ることとなった。集落遺跡では、米子市／大山町・妻木晩田遺跡洞ノ原地区の弥生時代終末期に相当する包含層から全長 2.5cm、径１～２mm の完形品が出土していることや（濵田 2003）、墳墓遺跡でも、豊岡市・妙楽寺墳墓群例をみると（瀬戸谷 2002）、このサイズの鉄針は、弥生時代後期段階にはすでに存在していた可能性が高い。

また、出土位置は銅鏡の北側で、被葬者の頭位方向にあったと考えられる。大谷の集成によると[1]、前期段階には、農工具と共伴する場合や櫛・玉類と共伴する事例が多い。農工具は被葬者の頭部付近に置かれる場合が多いことも考慮すると、針の出土位置としては被葬者の頭位周辺から出土する場合が多いと言える。この点では、全国各地の事例と共通しているが、棺の南西側の農工具類とは離れており、分け置かれるべき理由があったと考えられる。

（３）農工具

鎌は、県内の出土例の中では比較的大型の部類と言える（図６）。池淵俊一がかつて指摘したように、弥生時代には曲刃鎌が一般的であるが、前期古墳の副葬品としては直刃鎌しかみられない（池淵 2005）。新しいデザインの器物が上位首長層から導入されていった事情を反映しているとみられるが、副葬状態としては、わずかな例外を除いて着柄せず、布巻きされた状態で副葬されることが多い。このような副葬形態は、刀剣類がそうであるように、弥生時代に遡ると考えられる。

また、桂見２号墳例は、鎌身に穿孔が存在する点が特異である。穿孔の位置から考えて、柄を装着するための目釘穴とは想定しがたいが、これと同様な穿孔を施す例として鳥取市・美和 34 号墳例（山田 1994、図６- ５）があり、県内に複数例存在する点が注目される。このような穿孔は、製品としての鎌に対して非実用化するための儀礼的行為との見方も可能ではあろうが、むしろ、目釘穴のある刀剣類の茎を再加工した可能性も考慮すべきである。鳥取市・青谷上寺地遺跡では、鉄剣の身を曲刃鎌に再加工しようとした弥生時代中期後葉の事例が存在する（湯村 2002、p.244）。これ以外にも、弥生時代には他器種の再加工品がしばしば認められることを踏まえると、同様な方法によって当地で作られた鉄器と考えられよう。

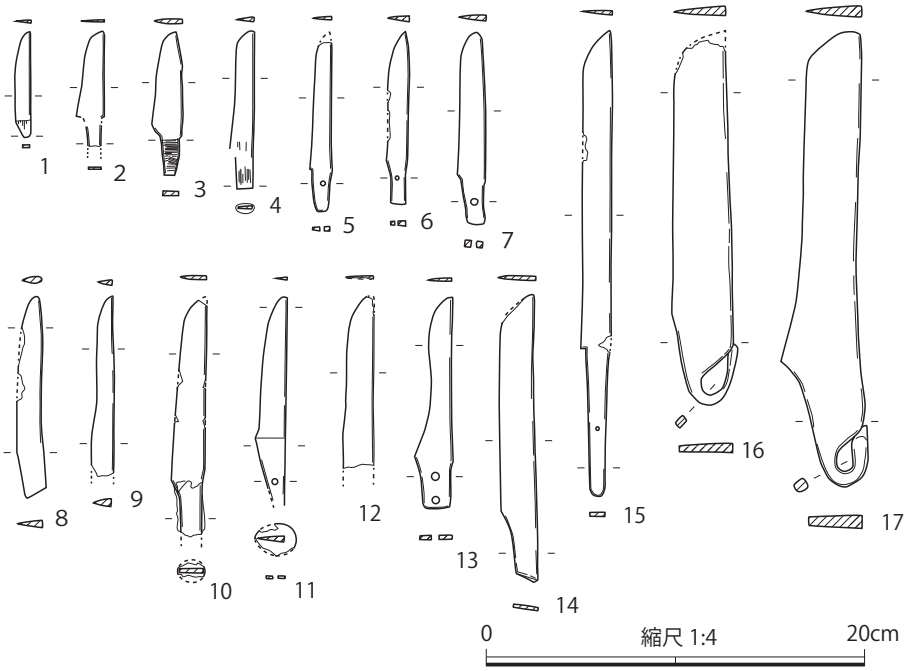
なお、県内出土例のほとんどは折り返し部が甲技法のものであり、折り返し部が下向きになる乙技法は非常に少ない。

刀子は、刃部長によって四つに分類しうる。刃部長が５cm 以下のものをⅠ類（図７- １～３）、５～７cm 程度のものをⅡ類（図７- ４～８）、７～ 10cm 程度のものをⅢ類（図７- ９～ 13）、10cm 以上になるものをⅣ類（図７-14）とすると、桂見２号墳例はⅣ類となる。山陰におけるこのサイズの刀子の類例としては、雲南市・松本１号墳（山本 1963）や安来市・吉佐山根１号墳（卜部他 1995）例が挙げられるが、いずれも直角関である。桂見２号墳例は、ナデ関となる点が鉄刀と共通しており、系譜差を示しているのかもしれない。

これ以外に、刀子として報告されるものに鳥取市・倭文３号墳出土例などがあるが（図７-15）、刀身長 17cm、茎長８cm に達するものは短刀に分類すべきであろう。池淵俊一の分類では A 類とされ、前期前半段階に多い類型とみなしうる（池淵 2019）。また、鳥取市・服部

18 号墳、同青谷町・大口 SX10 号墳出土の素環刀子（図７-16、17）は豊島分類のⅢ式で（豊島前掲）、弥生時代後期以降の山陰東部に事例が散見されるものである。弥生時代の地域色ある鉄製品が残存したものと考えられる。このように、多様なサイズ、系譜をもつ刀子が存在する点が前期段階における特徴と言えそうだ。

桂見２号墳の鉈は、古墳時代に最も一般的な形態である鏝状の刃部のもの、すなわち村上恭通がⅣａ式、田中謙がⅣ類とするもので（村上、田中前掲）、周辺の事例もこれが主流を占めている（図８）。平井洸史が示す茎部長に対する刃部長の比率を考慮した分類（平井 2021）では、多くはⅢｂ類の「短茎」に属し、全長 20cm を超えるものが「中茎」となる。畿内中枢の出現期古墳にも副葬されるような「長茎」タイプは、現状では見当たらない。



1. 横枕 61 号墳，2. 横枕 89 号墳，3. 大口 SX08 号墳，4. 横枕 68 号墳，5. 16. 服部 18 号墳，6. 広岡 81 号墳，7. 9. 倉見 4 号墳，8. 17. 大口 SX10 号墳，10. 服部 19 号墳，11. 倭文 7 号墳，12. 14. 桂見 2 号墳，13. 六部山 45 号墳，15. 倭文 3 号墳，

図７　桂見２号墳出土刀子と関連資料

県内の古墳出土事例を刃部形態と全長で分類すると、多様な類型に分けることができる。刃部にふくらみがなく茎部と同じ幅になるものでは、全長 10cm ほどの小型品で刃部の反りがないもの（図８- １、２）と全長 12 ～ 20cm で刃部に反りがあるもの（図８- ４～８）の二者がある。倉吉市・中峰２号墳例は、木製の柄と繊維がよく残存し、鉈の着柄方法の具体像がわかる好例となっているが、着柄するものは例外的で、ほとんどは鉄器本体に直接布巻きしたものである。横枕 61 号墳例（図８- ４）は、身幅が２cm 程度ある幅広なもので、弥生時代的な類型と言える。

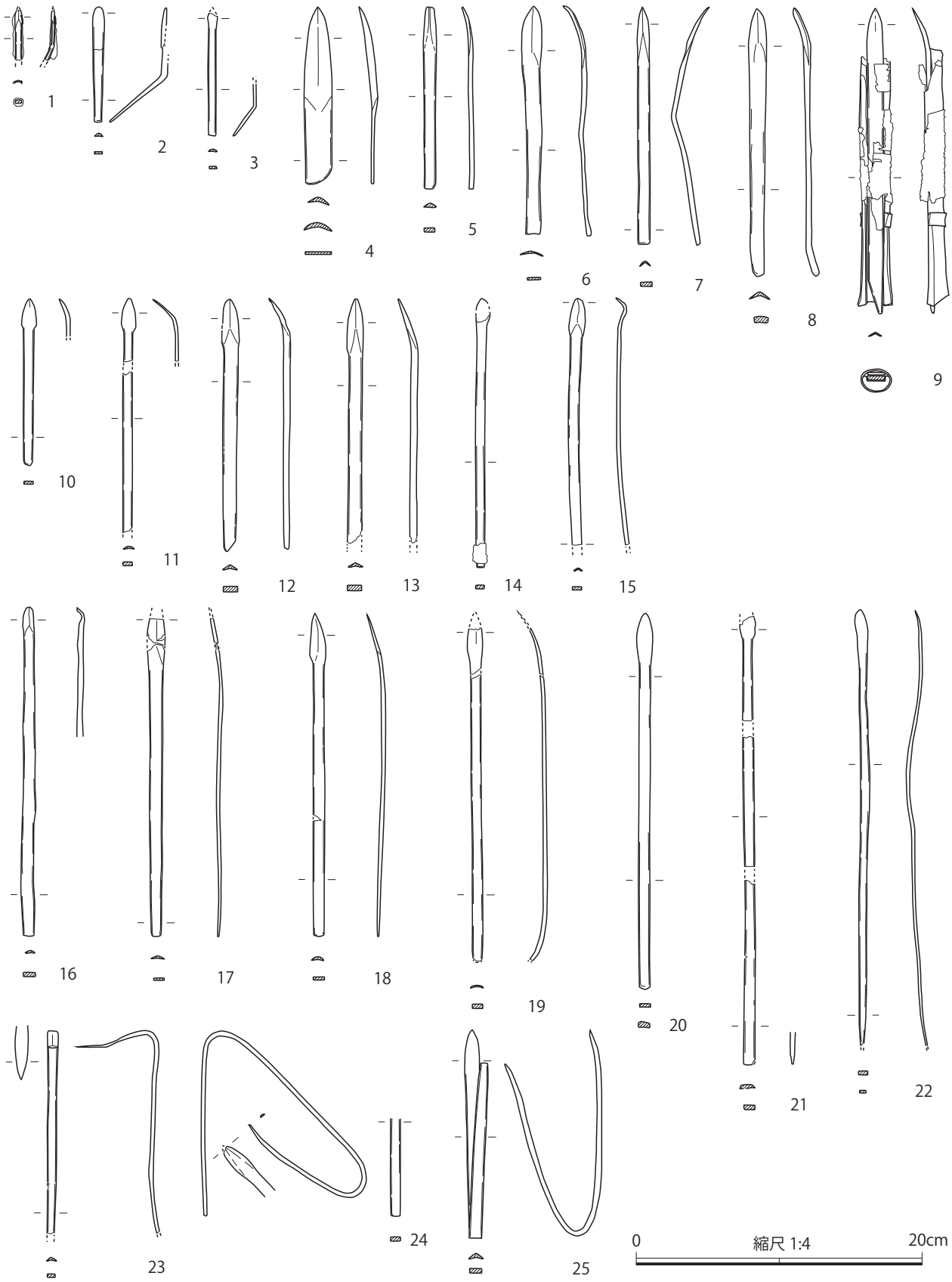
主流となるタイプは、長さと刃部形態でさらに数種類に分けることができる。広岡 76 号墳例（図８- ９）のように全長 12cm ほどの小型品も存在するが数は少なく、全長 20cm 以上となる大型品が多い（図８-16 ～ 26）。桂見２号墳例は全長 16 ～ 18cm ほどの中間的なサイズ（図８-10 ～ 15）に位置付けられる。

以上をまとめると、鳥取県域の前期古墳に副葬される鉄器類は、全般的に型式の刷新が認められるものの、弥生時代的な要素を残すものや地域産と考えられるものが散見される。そうした性格は、桂見２号墳の鉄器類にも認められるが、単器種、単数の副葬例が多い周辺の小規模墳に比べると、質と量の差が大きいと言えよう。２号墳に先行し弥生時代終末期に遡る１号墳は、玉類以外に棺内の副葬品を持たず、鉄剣や鉄鏃の破片が墓壙上の供献土器などとともに出土している。このことと比較すると、中国鏡２面の副葬と相まって、複数の鉄製品が棺内に副葬されることの画期性が際立つ。

５　おわりに

最後に鉄製品の出土状態についても触れておきたい。被葬者頭部側と考えられる位置に刀、針が、足部側と考えられる位置に鉈、刀子、鎌が置かれるという副葬品の分離配置形態は注意すべき点である。鳥取県東部を中心とする地域では、同一の棺に複数の遺体を葬る同棺複数埋葬が古墳時代前期にしばしば見られる（岡野 2000、髙田 2021）。同棺複数埋葬の認識は、葬送儀礼の際に使用したと考えられる土師器が遺体の頭部安定用の枕（以下、土器枕という）として木棺内に複数置かれることによるのが通例であるが、鉈や刀子などの農工具類が被葬者の頭部付近に配置されることが多く、被葬者の頭位を推測する手がかりとなることも知られている（原田・松山 2000）。このことを踏まえると、桂見２号墳では頭位を違える２体の埋葬があった可能性があり、その場合、山陰地方における同棺複数埋葬の初源例になると考えられる。

同棺複数埋葬では、被葬者が同時に死亡する可能性が高くないため、死亡から埋葬完了までの期間が長期化すると考えられる。実際に、埋葬時点で遺体が白骨化・風化していると考えられる鳥取市・古郡家１号墳北棺など



1. 普段寺 1 号墳，2. 15. 広岡 78 号墳，3. 14. 美和 43 号墳，4. 横枕 61 号墳，5. 松原 33 号墳，6. 8. 大口 SX-10 号墳，7. 広岡 81 号墳，9. 中峰 2 号墳，10. 広岡 76 号墳，11. 古海 40 号墳，12. 13. 桂見 2 号墳，16. 倉見 5 号墳，17. 桂見 10 号墳，18. 横枕 25 号墳，19. 横枕 22 号墳，20. 倭文土壙墓群 4 号，21. 広岡 82 号墳，22. 倭文 4 号墳，23. 古海 58 号墳，24. 倭文 3 号墳，25. 篠田 9 号墳

図８　桂見２号墳出土鉇と関連資料

1. 桂見 2 号墳主要埋葬施設全景，2. 棺内北東部の遺物出土状況，3. 棺内南西部の遺物出土状況，
4. 県指定保護文化財となった遺物一括，5. 刀子付着の布痕跡，6. 鎌身の穿孔

図９　鉄器の出土状況と細部

の事例からみると、死後数年程度以上の時間経過を経ている可能性がある。そのため、被葬者のために用意された副葬品も経年劣化を示していると考えられ、未撹乱の埋葬施設出土品であっても、鉄器などに破断、欠損が認められる（髙田他 2013、pp.83-85）。

桂見２号墳の刀や刀子１には欠損があり、木棺痕跡や破砕鏡の微小な破片検出など、丁寧な調査がおこなわれているにもかかわらず、これに接合する破片は認められていない。農工具出土地点付近は、盗掘坑の影響を被っていたようであるから、刀子１の茎は撹乱によって失われた可能性もあるが、未撹乱の被葬者頭部付近の鉄刀については、副葬以前に切先や茎が失われた可能性を考えなければならないだろう。もっとも、破砕鏡と同じく、鉄器の破砕副葬という現象も考えなくてはならないが、

破断面の観察から、刀本体に強い圧力が加わった痕跡がないことからすると、本例の場合に意図的な破砕行為を読み取ることはできない。副葬以前に劣化により破損していたと考えることが合理的であろうと推測する。

いずれにしても、桂見２号墳出土遺物は、山陰地方における古墳出現期の副葬品のあり方や埋葬習俗を復元する際に、重要な視点や手がかりを提供するものとして貴重である。

図出典

（いずれも以下の文献から，サビ，付着有機質など除いて鉄部分のみ抽出して再トレース）

図５- １・６、図７-11・15、図８-20・22・24：山田 2004。図５- ２・３：豊島 2005。図５- ４：横島他 1998。図５- ７、図６- ５、図８- ３・14：山田 1994。図５- ８：平川 1989。図６- １、図７- ５・10・16、図８-23：谷口 2001。図６- ２・11、図７- １・２・４、図８- ４・18・19：谷口 2003。図６- ３：髙田 2020。図６- ４、図７-13：髙田他 2013。図８- １：髙田 2013。図６- ６：岩本 2019。図６- ７：稲浜 1996。図６- ８、図７- ３・８・17、図８- ６・８：松下 1989。図６-10、図８-11：谷口他 1996。図６-12：小杉他 1989。図６-13：大川 2010。図７- ６：田中 1989。図７- ７・９、図８- ２・７・10・15・21、図８-16：前田他 1984。図８- ５：中森他 2010。図８- ９：岡本他 1998。図８-17：前田他 1993。図８-25：藤本 2004。

写真提供

１～３：鳥取市教育委員会、４：鳥取県　※５・６は筆者撮影

謝辞

資料見学にあたっては、鳥取市歴史博物館の神谷伊鈴さんのご援助を得た。また、出土状態写真等の引用については、鳥取市教育委員会の加川崇さんのお世話になった。記して感謝申し上げる。

註

(1) 蛇足ながら、鳥取県内の金属製針出土古墳について、情報の更新をしておきたい。古郡家１号墳は、北棺出土銅鏡の鏡面に鉄製針が銹着していると報じられたが、再整理の結果、針ではないことが判明した（髙田他 2013）。また、鳥取市・広岡 73 号墳第２主体部の箱式石棺で鉄製針２点が出土している（小杉他 1989）。被葬者の頭部付近で、古墳の時期は前期末～中期前半と考えられる。

【参考文献】

池淵俊一 1993「鉄製武器に関する一考察—古墳時代前半期の刀剣類を中心として—」『古代文化研究』第1号、島根県古代文化センター、pp.41-404

池淵俊一 2005「山陰における古墳時代前期半期の鉄器の様相」『考古論集—川越哲志先生退官記念論文集—』川越哲志先生退官記念事業会、pp.435-454

池淵俊一 2019「武器からみた伯耆国分寺古墳の年代」『伯耆国分寺古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会、pp.53-60

稲浜隆志（編）1996『面影山古墳群発掘調査報告書—面影山 32・33・34・35・36・83・88・97・98 号墳の調査—』

岩本崇（編）2019『伯耆国分寺古墳の研究』島根大学法文学部考古学研究室・伯耆国分寺古墳研究会

宇垣匡雅 1997「前期古墳における刀剣副葬の地域性」『考古学研究』第 44 巻第１号、pp.72-92

卜部吉博・錦田剛志他（編）1995『平ラ II 遺跡・吉佐山根１号墳・穴神横穴墓群』建設省松江国道事務所・島根県教育委員会

大川泰広（編）2010『本高古墳群』鳥取県教育委員会

大谷宏治 2012「古墳出土の金属製針について」『静岡県埋蔵文化財センター研究紀要』創刊号、pp.13-24

岡本智則他 1998『中峰古墳群発掘調査報告書』倉吉市教育委員会

岡野雅則 2000「鳥取県内における同棺複数埋葬について」『島古墳群・米里三ノ嵜遺跡・北尾鎌谷遺跡』（財）鳥取県教育文化財団、pp.84-87

岡林孝作・水野敏典・奥山誠義（編）2018『黒塚古墳の研究』八木書店

小杉宗雄他（編）1989『広岡古墳群発掘調査概要報告—広岡 72・73・74・75 号墳の調査—』鳥取市教育委員会

瀬戸谷晧（編）2002『妙楽寺墳墓群』豊岡市教育委員会

髙田健一 2013『山陰における前方後円墳の出現過程—2010 年度～ 2012 年度科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書—』鳥取大学地域学部

髙田健一 2020「馬ノ山（橋津）古墳群」『新鳥取県史（資料編）』考古２古墳時代、鳥取県、pp.405-416

髙田健一 2021『因幡・伯耆の古墳時代』鳥取県史ブックレット 23、鳥取県

高田健一・東方仁史 2013『古郡家１号墳・六部山３号墳の研究』鳥取県

田中謙 2008「弥生時代における鉇の機能分化とその意義」『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』下條信行先生退任記念事業会、pp.303-322

田中哲夫他（編）1989『広岡古墳群発掘調査概要報告書—広岡 76・77・78・79・80・81・82 号墳の調査—』鳥取市遺跡調査団

谷口恭子他（編）1996『山ヶ鼻遺跡Ⅱ』（財）鳥取市教育福祉振興会

谷口恭子（編）2003『横枕古墳群Ⅱ—姫鳥線整備促進関連事業に係る横枕 10・11・22 ～ 26・36・59 ～ 64・67 ～ 91 号墳の発掘調査—』（財）鳥取市文化財団

谷口恭子（編）2001『服部墳墓群—姫鳥線整備促進関連事業に係る服部 16 ～ 19・34・36 号墳、服部1～3号墓の発掘調査—』（財）鳥取市文化財団

谷口恭子（編）2011『古海狐塚遺跡・古海古墳群—鳥取地区工業用水道工事に伴う古海狐塚遺跡、古海 11・58 ～ 64 号墳の発掘調査—』（財）鳥取市文化財団

都出比呂志 1967「農具鉄器化の二つの画期」『考古学研究』第 13 巻第３号、pp.36-51

豊島直博 2005「弥生時代における素環刀の地域性」『待兼山考古学論集—都出比呂志先生退任記念—』大阪大学考古学友の会、pp.227-245

中森祥・後川恵太郎（編）2010『松原古墳群Ⅱ・松原小奥遺跡』鳥取県教育委員会

濵田竜彦（編）2003『史跡妻木晩田遺跡第４次発掘調査報告書』鳥取県教育委員会

原田敏照・松山智弘 2000「社日古墳群の位置付けとその評価」『社日古墳』建設省松江国道事務所・島根県教育委員会、pp.54-65

平井洸史 2021「古墳時代鉄製工具の様式的展開—近畿中央・吉備・北部九州地域を中心として—」『古代吉備』第 32 集、pp.46-65

平川誠 1989「生山古墳群」『第 25 回埋蔵文化財研究集会　古墳時代前半期の古墳出土土器の検討（第Ⅱ分冊）』埋蔵文化財研究集会、pp.563-567

福永伸哉・杉井健（編）1996『雪野山古墳の研究』報告篇、八日市市教育委員会

藤本隆之 2004『篠田古墳群—中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進関連事業に係る篠田５～ 11 号墳の発掘調査報告書—』（財）鳥取市文化財団

船井武彦・杉谷美恵子・平川誠（編）1984『桂見墳墓群』鳥取市文化財報告書 18、鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団

前田均他（編）1984『西桂見遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会・倉見古墳群発掘調査団

前田均他（編）1989『桂見墳墓群Ⅱ』（財）鳥取市教育福祉振興会

松下利秀 1989『大口遺跡群発掘調査報告書（大口第２遺跡）』青谷町教育委員会

村上恭通 1998「鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』平成７年度～平成９年度科学研究費補助金（基盤研究 B）研究成果報告書、pp.63-142

山田真宏（編）1994『平成４・５年度美和古墳群発掘調査報告書』（財）鳥取市教育福祉振興会

山田真宏（編）2004『倭文所在城跡・倭文古墳群』（財）鳥取市文化財団

山本清 1963『松本古墳調査報告』島根県教育委員会

湯村功（編）2002『青谷上寺地遺跡４』（財）鳥取県教育文化財団

横島和則・丸山次郎 1998『大田南古墳群／大田南遺跡／矢田城跡－第２次～第５次発掘調査報告書－』弥栄町教育委員会

鳥取県埋蔵文化財センター

調査研究紀要 15

発行　令和５（2023）年 12 月 8 日
編集　鳥取県埋蔵文化財センター
〒 680-0151　鳥取県鳥取市国府町宮下 1260
https://www.pref.tottori.lg.jp/maibun/
印刷　山本印刷株式会社

この冊子は 400 部作成し、1 部あたり 1,000 円です。